

日本タバコ会社 最終回

喫煙者の権利を守る会

佐伯は、島崎との会合の後、「喫煙者の権利を守る会」略称KKM会の事務局長の下田良子と会う約束をした。こちらは、最初から好意的であった。佐伯は、会の入っているビルまで出向いた。佐伯は「反禁煙」運動の会の幹部が女性であることに驚いていた。偏見と思われるかもしれないが、佐伯は、喫煙行為は女性に似つかわしくないと思っている。

KKM会の事務所は、永田町の貸しビルの三階にあった。政治家の支援を受けるために、この立地を選んだということらしい。ロビー活動の本部といったところだろうか。名誉会長には、与党民自党の山田啓祐が就いている。山田は、青森選出の国会議員で、支援団体にタバコ関係の組織が並んでいる。

受付はなく、インターフォンで来訪を告げると、自動ロックが解除された。ドアを開けると、すぐ左隣に応接室がある。現れた女性は、佐伯と同年代に見えた。互いに名刺を交換した。佐伯は最初は気づかなかったが、驚いたことに、応接室は禁煙となっている。

「この部屋は禁煙なのですね」

「あら、佐伯さんはタバコが吸いたいですか」

「いえ、私はタバコを吸いませんので」

下田は驚いたように佐伯を見た。

「みなさんは、KKM会の会員は処構わずタバコを吸うと誤解しているようですが、禁煙のサインがある場所では絶対に吸いません。この応接室も、非喫煙者のマスクミの方が多く取材に来られるので、禁煙にしております」

「それでも、下田さんは喫煙をなさるのでしょう」

「ええ、もちろんです」

「何年くらい吸ってらっしゃるのですか」

「もう三〇年くらいかしら。一日一箱を切らしたことはありません」

「そんなになりますか」

佐伯は、この人の肺はきっとタールで真っ黒だろうなを思った。

「この会は、下田さんが設立されたのですか」

「そうですね。正確には、設立に協力したひとりと言った方が正しいかしら」

「現在のメンバーはどの程度いるのですか？」

「会員は三〇〇人くらいかしら。その他、支援いただいている国会議員が五〇人ほど居られます」

佐伯は、国会議員の数の多さに驚いた。

「会を設立されたきっかけは何ですか？」

「一〇年ほど前かしら、喫煙に対する目が厳しくなった頃、喫煙者の権利を真守る必要性

を感じたの。私たち喫煙者は、煙を嫌がる人たちのことは尊重していたつもりだったのに、嫌煙運動が、まるで、ファシズムのような動きになってしまったの。その中で、喫煙者の自由が奪われるようなことが、どんどん出てきて、これでは困ると思ったわけ。それで、人権擁護という観点から立ち上がったというわけよ」

「人権擁護ですか」

「ええ、政府が個人の生活に干渉すべきではない。それが私たちの主張よ。会員の中には非喫煙者の人たちも居て、政府の干渉に対して、一緒になって抗議してくれているわ」

「現在のいちばんの懸案は何ですか？」

「海外のような行き過ぎを日本には持ち込まないことね。公共の場所をすべて禁煙にするなんて馬鹿げているわ」

「なるほど。しかし、タバコの煙に害があるということが科学的に証明されているという人たちがいますが、その主張をどう思われますか。それが、禁煙化の動きを後押ししていると思いますが」

「その点に関しては、あまり議論はしたくないの。それは、私たちがそれを認めているということではなくて、それこそ他人の意見に耳を貸さないという態度がみえみえだからよ。私たちを支援している科学者や医者の中には、タバコの害に関して否定的な見解を持っているひとも多いのよ」

「そうですか」

「例えば、私の知り合いの医者は、よくタバコを吸うんだけど、がん患者に喫煙をやめさせるのは愚の骨頂だと言っている。タバコを吸えないというストレスの方が強くて、かえって死を早めるというの」

「ということは、下田さんはタバコによって健康に害はないという立場なんですね」

「他人のことはどうか分からないけど、私自身はいたって健康よ。タバコのことを言うなら、アルコールや太りすぎの方が問題でしょう」

佐伯は、こういう信念を持っている喫煙者がどれくらいいるのだろうかと思った。確かに、喫煙者でも長生きするひとが多い。知り合いの老人など九〇歳を超えても元気にタバコを吸っていた。もしかすると、ひとによってタバコに対する耐性が異なるのかもしれない。もし、タバコを吸っても、健康を害さないという人がいるのなら、それはNTSにとっても朗報かもしれない。

「現在、わが社では、喫煙者と非喫煙者が共存できる社会の実現をめざしています。この考えをどう思われますか」

「それはいい考えね。この団体の趣旨にも合致しているわ。私たちは、何も非喫煙者に迷惑をかけようと思っていないわけではないの。自分達がタバコを吸う権利を守りたいだけなの」

「いまわれわれが実行したいと思っているのは、あらゆる施設を禁煙化するかわりに、排煙設備の整った喫煙所も同時に設けるといふものです」

「それはいい考えだと思うわ。成田や、羽田空港のように、ちゃんと喫煙所を作ってくれていれば、喫煙者はちゃんとルールを守るものよ」

この時、佐伯は島崎が言った言葉を思い出していた。喫煙所をつくっても、それを無視して禁煙場所で吸う不届き者もいるということであった。

下田は続けた。

「最近、禁煙サインのない場所で喫煙していても、露骨に嫌な顔をして睨んでくる連中が多いの。どうかしているとしか思えないわ」

佐伯は、下田にあって少し希望が見えてきたような気がした。まず、驚いたのは、KKM会は、どんな場所でもタバコを吸ってやろうというような過激な団体だと思っていたが、それが誤解であった点だ。ちゃんとルールを守ったうえで、喫煙者の権利を守りたい。それが、この会の主張である。それならば、禁煙団体との折り合いがつけられるかもしれない。佐伯は、島崎の顔を思い浮かべた。ふたりの会合は可能だろうか。

それと、もうひとつ新たに気づいた点もある。それは、喫煙をしていても健康でいられる人間が居るということである。これは、佐伯がいままで見落としていた点であった。もし、これが正しいとしたら、そういう人間にタバコを販売すればよいことになる。すると、タバコ全否定ということが不必要になり、NTSにとっても活路が見出せることになる。

和解

佐伯の説得で、タバコのない社会を実現する会の事務局長である島崎隆二と喫煙者の権利を守る会であるKKM会の下田良子事務局長との会合が実現することとなった。ふたりとも、最初は真っ向から反対していたが、佐伯が、反対意見の方に耳を傾けるのも重要ではないかという粘り強い説得をしたところ、ふたりとも折れた感じがある。しかし、佐伯には勝算はあった。会った印象から、ふたりとも、それほど話の分からない人間ではないと思ったからだ。

会合場所は、都内にあるビジネスホテルの会議用の貸部屋である。八畳ほどの狭い部屋であるが、三人の会合には十分の広さである。ホテルでは、灰皿を用意しているが、もちろん、会場は禁煙とさせてもらった。下田がタバコを吸おうものなら、まとまる話もまとまらなくなる。

島崎と下田のふたりは、話したことはないが、互いに顔は知っているようだ。佐伯が、まず挨拶した。

「本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。今日の会合が実り多きものになることを期待しております」

すると、島崎が言い出した。

「佐伯さんの意図が分からないな。こんな会合を持っても無意味でしょう。下田女史とは、最初から、考えがまったく違うのだから、話し合いの余地などないと思いますよ」

「まあ、島崎さん。そうおっしゃらずに、忌憚のない意見をぶつけあったらどうですか。こんな機会はめったにないと思いますよ」

「自分のゴルフが下手になった理由をタバコの所為にしている人とは、不毛な議論しかできないのじゃないかしら」

今度は、下田が言いがかりをつけた。

「結婚もせず、子供も持ったことのない独身女に喫煙の害を訴えたところで、どうにもならんでしょう」

島崎は、そちらがそう出るなら、こちらにも考えがあるぞという態度で、すごんでいる。これでは、話のきっかけができない。

「ちょっと、お待ち下さい。おふたりとも少し頭を冷やしていただけませんか。これから、私の方からおふたりに質問しますので、それに答えていただけないでしょうか」

少し大人気ないと思ったのか、ふたりは頷いた。

「それでは、島崎さんにお聞きします。もし、非喫煙者に迷惑のかからないようなかたちで、喫煙者がタバコを吸ってくれるのだとしたら、それでも禁煙を訴えられますか？」

「喫煙による迷惑がなくなるとは思いませんが、仮に、われわれに迷惑がかかなくなったら、それほど目くじらを立てることはないと思いますよ。ただし、日本人プロゴルファーがタバコを吸いながらプレーしている姿をテレビでみると、情けなくなります」

「なるほど。それでは、下田さんにお聞きします。下田さんは、タバコを嫌がるひとの前で、わざと喫煙などということはしませんよね」

「当たり前ですわ。私たちは、タバコを吸うことをわれわれの意志に任せて欲しいと言っているだけで、もし、他人が不快に思うならば、そういう場所ではタバコを吸う気はありません」

すると、島崎は

「そんなことはないでしょう。禁煙というサインがあるところでも、平気でタバコを吸っている人間は居ますよ」

と反論した。

「それは、禁煙のサインがないからではないですか。それが、ちゃんと表示してあれば、大抵の人間はルールを守っているはずですよ」

「例え、禁煙のサインがなくとも、エチケットとして遠慮すべき場所はあるでしょう」

また、険悪な雰囲気になりそうなので、佐伯が間に割って入った。

「ちょっと待って下さい。いまは、私が質問する時間です。いまのおふたりの話を聞いてみると、タバコを吸っていいかどうかが明示されていない場所での喫煙が問題ということになりそうですが、それでよろしいですか」

すると、下田は

「ええ、そうですわ。私たち喫煙者は、禁煙のサインがあるところでは吸いません。それが無ければ、吸っていいと思うのが当然でしょう」

「何を言っているんだ。たとえ、禁煙のサインがなくとも、多くの人が集まる場所では、喫煙を遠慮するのが当然でしょう」

と島崎は文句を言った。

「いいですか。喫煙者はたったひとりで何十人というひとを不愉快にさせることができるのです。かつてイタリアに旅行に行ったときに、こんなことがありました。感じのいいビストロで食事をしていると、日本人と思しき一行が入ってきたのです。その中のひとりが当然というようにタバコに火をつけました。すると、せっかく和やかな雰囲気、いっきに変わりました。嫌なおいが狭いレストランに充満したからです。アメリカからやってきた夫婦は憤然と席を立っていきまし、まわりの旅行客も、みな露骨に嫌な顔をしていました」

すると、下田は

「そのレストランが喫煙可だったからでしょう。もし、だめなら禁煙のサインを出すべきです」

「いや、それは違う。あんな狭い場所でタバコを吸ったら、まわりの人間が不愉快になるのは目に見えています。それは、良識ある人間なら分かることでしょう。その時は、これで、日本人がまた世界から譽盛を買ったと情けなくなりました」

佐伯は聞いてみた。

「島崎さんは、黙っていたのですか？」

「いえ、もちろん、憤然と席を立って抗議に行きましたよ。そうしたら、何と言ったと思います？」

「わかりません」

「ここには禁煙とは書いていない。タバコが嫌なら、禁煙のレストランに行け。そう言われました。後で、分かったことですが、観光客の多いあの地区のレストランは、すべて禁煙ということだったようです。だから、店に禁煙サインが無かったのです」

「それは、困りましたね」

「日本人は、常識としてどこでもタバコが吸えると思っているから、こんな失態を犯すのです」

すると下田が食い下がった。

「確かに、いまの話は問題がありますが、禁煙ということを知らなかったのですから、ある程度しょうがないのではないのでしょうか。もし、禁煙と知っていたら、その人もタバコは吸わなかったでしょう」

「最近の世界の常識は、不特定多数のひとが集まる場所では喫煙を遠慮するというものです。日本はひどすぎますよ」

佐伯は口をはさんだ。

「確かに、島崎さんの言うことも分かりますが、つい一〇年前までは、日本ではどこでもタバコが吸えました。世界に比べて、日本の対応が遅いということは否めないと思います。

ですから、喫煙者の自覚も、外国に比べて低いのは仕方がないことではないでしょうか。むしろ、政府の対応の遅れを問題視すべきだと思います」

「タバコ会社の佐伯さんから、そんな言葉を聞くとは思いませんでした。それに、よしんばそうだとすると、最近では、タバコの害に関する情報が巷にあふれています。もう少し、日本の喫煙者は敏感になってもいいのではないのでしょうか？」

すると、下田は

「島崎さん。それは違いますよ。かなりの喫煙者は気を使っています。禁煙の場所ではタバコを吸うものなど、そう居ません」

佐伯は切り出した。

「下田さんの話を聞いていると、例外は別にして、多くの喫煙者は喫煙ルールを守っているということになります。一方、島崎さんの話では、ルールを守らない喫煙者が結構いるということになるので、おふたりの話は矛盾したことになります」

ふたりとも、佐伯の指摘にうなずいた。

「しかし、おふたりの話は、このように整理できませんか。喫煙者と非喫煙者とは、どこでタバコを吸っていいかという基準が異なっていると。つまり、下田さんが吸ってもいいと思っているところでも、島崎さんには迷惑とを感じる場合があるのだと。どうでしょうか」

下田はうなずいた。

「そういうことになりますね。だから、もしタバコをよして欲しいのなら、きちんと禁煙というサインを出すべきなのです」

佐伯は島崎の方を見た。

「確かに、佐伯さんの考えにも一理あると思います。実は、うちの貸しビルは雑居ビルなので、いろいろな会社や団体が入っているのです。結構、トイレで吸ってもいいと勘違いしているものが多くて、難渋しました。そこで、禁煙サインを買ってきてトイレに貼ったら、とたんに喫煙は少なくなりました。もちろん、大の方で隠れて吸っている不屈き者はいますがね」

「とすれば、喫煙者でも禁煙のサインさえ出せば、ルールを守ってくれるひとが多いということではないでしょうか」

島崎は仕方がないように

「確かに、それは言えるかもしれませんが」

と、佐伯に同調した。

「島崎さん。どうでしょうか。もし、喫煙者が非喫煙者の迷惑にならないような喫煙行動をとるとしたら、どうしますか。いまのように反対しますか？」

「まあ、われわれに迷惑がかからないならば、いまのように目くじらたてて、禁煙を唱えることはないでしょう。もちろん、喫煙の害は訴えますが、そのうえで、吸うかどうかは個人の勝手でしょう」

「そうですか」

「下田さんの考えは、もともと、喫煙者の権利が守られるならば、文句はないということでしたよね」

「ええ、なんでもかんでも禁煙ではなく、われわれが吸う権利を保障してくれるなら、文句はありません」

「そうですか。それを聞いて安心しました。実は、おふたりに協力いただきたいことがあるのです」

ふたりは、佐伯の方を向いた。それまで、お互いの顔を背けていたが、いまは視線があっても、露骨には避けなくなっている。

「実は、NTSとしては、公共の場所はすべて禁煙とすることを訴えようとしています」すると、下田は

「なんですって。そんなことは許されませよ」

と抗議した。

「ちょっと待ってください。これには、まだ話があります。禁煙にするかわり、排煙設備の完備した喫煙所を設ける。これが、われわれの提案です」

下田は、それを聞いて安心したようだ。

「喫煙所を設けるという条件つきなら、禁煙とする案には賛成です。喫煙できる場所でも、タバコを吸っていると、睨まれることが結構ありますからね」

佐伯は、島崎の方を見た。

「普通の喫煙所は、煙くしょうがないが、排煙設備がついているなら文句はないですな。」

「ありがとうございます」

佐伯は、ふたりに礼を言った。

「しかし、佐伯さんは、それをどうやって実現するつもりですか。結構、金もかかりますよ。まさか、全費用をNTSさんが持つというわけではないでしょう」

「それができれば簡単なのですが、日本全国に広めるとなると、かなりの額が必要になります」

「そうですね」

「そこで、議員の先生にお願いして、すくなくとも新しく建設する公共施設には、法律で喫煙所の設置を義務化するよう働きかけたいと思っています。」

すると、島崎が文句を言った。

「ちょっと、待ってください。それは、税金を投入するということでしょう。簡単には、納得できませんな」

「そのお気持ちは分かります。しかし、最初から設計に入れていると、それほど大きな負担にはならないことが分かっているのです。もちろん、排煙設備に関しては、NTSも協力させていただきます」

「しかし、税金の投入には抵抗がありますな」

島崎は、なかなか納得してくれない。

「実は、既存の施設に新たに、排煙設備の完備した喫煙所を設けるのは、エクストラの予算が必要になりますが、新設の際に導入する際には、ほとんどコストが掛からないのです。まったくゼロではありませんが、NTSが協力すれば、税金の投入は必要ないくらいです」
「それなら、あまり、文句は言えませんか」

「それに島崎さん。今のままでは、すぐに禁煙なんて無理な話ですよ。その間、非喫煙者は、タバコの煙にさらされ続けることになります。それで、よろしいのですか」

島崎は考えているようだ。確かに、佐伯の言う通りである。いまだ、国会では喫煙者が圧倒多数を占めている。禁煙を声高に叫んだとしても、完全禁煙法案など、まず国会を通らないだろう。とすれば、佐伯の提案は現実的な解決策である。

「下田さんはいかがですか」

「公共の場を禁煙にするかわり、整備された喫煙所を設けていただけるならば、多くの喫煙者に文句はないと思いますよ」

「そうですか。それをお聞きして安心しました」

最後には、島崎も佐伯の考えに同調してくれた。佐伯はほっとしていた。この考えは、権藤の考えであるが、NTSの将来を考えれば、唯一の解決策かもしれない。現実的には、いまずすぐに喫煙所の完備は難しいかもしれないが、これで、喫煙者と非喫煙者が何とか互いを尊重して生活できる社会が実現できそうだ。

エピソード

娘の詩織を保育園に送った後、佐伯は家での仕事を終え、出勤の準備をした。自分の選択が正しかったかどうか、いまだに迷うこともあるが、妻の小枝子は

「これでよかったのよ」

といつも言ってくれている。岳父の権藤には、期待に沿えずに申し訳ない気がするが、権藤は、詩織のことを目に入れても痛くないというほどの可愛がりようで、娘のだんなが大企業の重役の座を辞めたことにも、あまり頓着していない。娘が大学教授で、生活に困らないということもあるのだろうが、孫が元気ならばいいという感じである。

佐伯が、NTSを辞めると言い出したとき、社長の品川は

「それは、絶対に許可できない」

と強硬だった。

「今回の、分煙検討会の設置に関しては、佐伯君の功績が大きい。それをほっぽり出すというのはどうだろうか」

しかし、佐伯の決意は固かった。

「社長、申し訳ありませんが、この辞表は受け取っていただきたいのです」

佐伯は、娘が生まれてから、自分がタバコ会社の社員であることに大きな疑問を抱くよう

になっていた。タバコの煙は、大人よりも子供たちに悪影響を与える。佐伯は、詩織がタバコの被害にあわないように、必死になって注意を払ってきた。そして、そんな自分が、そのタバコを売っている会社の重役であるということに自己矛盾を感じていたのである。

佐伯が、N T Sを辞めたいと小枝子に相談すると

「それは大歓迎よ」

と言ってくれた。

「だって、両親ともが超多忙の生活では、詩織が可愛そうでしょう。それに、タバコが子供によくないということも、改めて詩織が生まれてから実感したの。詩織が将来大人になった時、父親の商売がタバコの販売とは堂々と胸をはって言えないわよね」

佐伯は、ふと、熊田のことを思い出していた。かつて、胸をはって、お国のために働いているんだと自慢していた職業、それが、国賊のように思われている。それは、とてもつらいことである。

小枝子は、佐伯に専業主夫になるように進めたが、さすがに、それは受け入れ難かった。幸い、民衆党の田中の世話で、新しいN P O法人の

「分煙社会をめざす会」

の事務局長の職を得ることができた。非常勤で、給料は月に十五万円程度と安い、佐伯には天職に思えた。忙しい時期を除けば、勤務時間も佐伯の自由になる。佐伯は、いずれは、禁煙団体と喫煙者の権利を守る会を合併して、分煙を目指す会に統一できないかと考えていた。

島崎は笑って

「そんなことは無理に決まっているでしょう」

と相手にしない。下田は

「こちらは、それでもいいですけど、あのファッショナな団体が理解を示すとは思えないわ」と言っている。

幸か、不幸か、喫煙が野放しにされてきた。今でも、地方に行けば、タバコを吸える公共施設が山のようにある。喫煙が害であるということは、多くのメディアが伝えているところであるが、長年、喫煙を当たり前という生活に慣れてきた人間にとって、それを変えるということは難しいことなのである。

そのおかげで、政府は、いきなり完全禁煙という立場ではなく、分煙をめざすという方向に転換してきている。そして、ある一定規模以上の事業所には、換気設備を整えるように指示している。権藤のねらいは正しかったようだ。

詩織を保育園に迎えに行くと、保育士が詩織にこんな事を言った。

「いいわね、詩織ちゃんは。いつもパパが迎えに来てくれて」

佐伯のことを見つけると、詩織は懐に飛び込んできた。保育園の待合室のテレビにふと目をやると、ニュースが流れていた。

「今日午前五時に、俳優の山田太郎さんが亡くなりました。七〇歳という若さに、まわり

の人間は悔しさを隠しきれない様子です。山田さんは、大のタバコ好きで、昨年一〇月に咽頭ガンであることが分かりました。大手術の後、一時は芸能界に復帰しましたが、すぐに肺への転移が見つかり、そのまま帰らぬひととなりました。手術後は、好きなタバコを控えて復帰を目指していましたが、残念ながらその夢は、適いませんでした。棺には、山田さんが好きだったタバコを、ご遺族が入れたそうです」